

平成19年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）報告

4th EASS Conferenceに参加して

北村尚浩*, 川西正志*, 成田 好**

はじめに

ヨーロッパ・スポーツ社会学会（European Association for Sociology of Sport: EASS）は、ヨーロッパにおけるスポーツの社会科学的研究を促進し、EU や欧州会議に対して科学的な助言を行なうことを目的として、2001年に設立された。これまでに4回の学会大会が開催されており（オーストリア・ウィーン：2002年，ポーランド・ジェシュフ：2004年，フィンランド・ユバスキュラ：2006年，ドイツ・ミュンスター：2007年），約30年の歴史を持つ北米スポーツ社会学会や1992年に設立された日本スポーツ社会学会などと比較すると，歴史の浅い学会である。

筆者らは2007年5月31日から6月3日までの間，ドイツ・ミュンスターで開催された第4回大会に参加する機会を得た。“Local Sport in Europe”をメインテーマに据え，ホスト国のドイツをはじめとするヨーロッパ諸国のみならず，アジアや北米地域など32ヶ国から200名以上が参集した。日本からも筆者らの他，神戸大学，大阪体育大学などの研究者，大学院生など9名が参加した。

本稿では第4回ヨーロッパ・スポーツ社会学会の概要を報告するとともに，本学会大会における研究発表から，ヨーロッパにおけるスポーツ社会学の研究動向について述べる。

参加国とセッションテーマ

今大会の発表演題数は147演題であった。地域

別の発表状況を見ると，EU加盟国が70.1%を占めており，EU圏外を含めるとヨーロッパが約8割を占めていた。北・南米やアジア諸国からの発表者もおよそ10%見られた（表1）。国別では開

表1. 参加地域 (N=147)

	n	%
EU諸国	103	70.1
北・南米	15	10.2
ヨーロッパ (EUを除く)	11	7.5
アジア	11	7.5
中東	7	4.8

催国ドイツからの発表数が20.4%で，イギリス，ポーランド，ブラジルと続いている。ヨーロッパ圏内でもドイツと国境を接する近隣諸国（ポーランド，チェコ，ベルギーなど）からの発表が多く（表2），開催地までの利便性が地域別の参加状況に影響していることが示唆される。

今大会では3日間にわたって述べ32のセッション

表2. 発表数上位10カ国

	n	%
ドイツ	30	20.4
イギリス	13	8.8
ポーランド	10	6.8
ブラジル	10	6.8
日本	9	6.1
スウェーデン	6	4.1
ポルトガル	6	4.1
チェコ	5	3.4
フィンランド	5	3.4
ベルギー	5	3.4
ノルウェー	5	3.4
ロシア	5	3.4
イラン	5	3.4

*鹿屋体育大学生涯スポーツ実践センター

**鹿屋体育大学大学院体育学研究科

表3. セッションテーマ一覧

Evaluation, performance, learning and perception	Sport activity
Formal and informal networks	Sport and culture
From the body to the fitness branch	Sport and ethics
Gender issues	Sport and health
Global and local sport events	Sport and identity
Life time sport	Sport and media
Local sport and recreation	Sport as a social field
Local sport and sport facilities	Sport clubs
Local sport and theory	Sport facilities
Local sport development	Sport history
Migration and sport	Sporting disciplines at local level
Performative ethnographies and (g)local sport - in memoriam Eduardo Archetti	Top-level sport
Public sport policy	Tourism and economy
Sociology of football	Youth sport

ンが開かれた。表3にはそのテーマを示している。メインテーマを踏襲する形で、Local Sport に關するセッションが6つ設けられているのが特徴的であった。この他、Gender 問題やスポーツと文化、アイデンティティ、倫理など、スポーツ社会学の分野ではポピュラーなテーマが取り上げられている。サッカーの社会学 (Sociology of football) のセッションが設定されているのは、ヨーロッパの学会ならではのである。

筆者らは、川西が Formal and informal networks のセッションで “The community impact as the sporting localism in the new Japanese local professional baseball league” の演題で、四国アイランドリーグに見られるわが国のスポーツのローカリズムについて報告し、北村が Local sport and sport facilities のセッションで “Youth sports environment in Japan: challenges from the schools to the communities” の演題で、日本における学校運動部活動と地域との連携の現状と課題について発表した。また、大学院1年の成田も Local sport and recreation のセッションで “Social development of youth’s physical activity and Japanese Comprehensive Community Sports Club” の演題で、わが国で政策的に展開されている総合型地域スポーツクラブが、子どもの体力向上に果たす役割について報告した。

今大会のセッションはいずれも、教室での講義形式とは異なり、小さな部屋でテーブルを囲んで討議する、いわゆるラウンド・テーブルディスカッションの形式で行われた。基本的にはセッションの演者全員の発表が終わった後に質疑応答の時間が持たれ、座長、演者、フロアを交えて活発なディスカッションが交わされた。



写真1. 発表の様子

ヨーロッパにおけるスポーツ社会学の研究動向

アブストラクト集を元に、今大会における研究発表の動向を検討した。ヨーロッパでの研究動向を把握するため、アジア、中東、北・南米からの研究発表を除外して考察を行った。

研究方法論としては、調査研究がヨーロッパ諸

国の発表114演題のうち, 調査研究に属するものが約73%を占め, 社会学的理論や文献資料を扱った文献研究は, 約27%であった (図1)。参加し

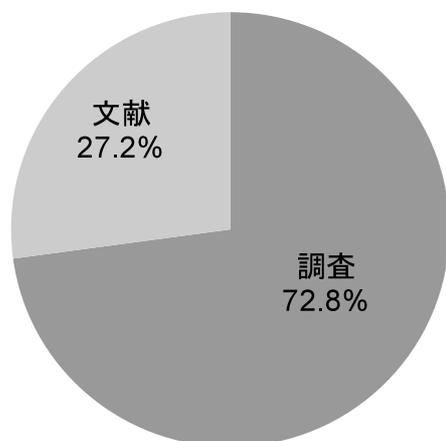


図1. 研究方法 (N=114)

た印象からは, 以前筆者が参加した北米スポーツ社会学会に比べ, 社会調査に基づく計量的な研究が多いように感じられた。

次に, 各アブストラクトから総計233のキーワードを抽出し, どのようなトピックに関心が向いているのかを検討した。最も多かったキーワードから上位10位までを表4に示している。今大会のテーマが“Local Sport in Europe”ということもあり, 地域のスポーツ活動やスポーツ政策など, 「地域」に関するキーワードが最も多く見られた。また, ヨーロッパが発祥の「サッカー」, 「スポーツクラブ」なども比較的多く見られた。さらに, 現在ヨーロッパ各国で見られる社会問題として「移民」というキーワードを含むものもあり, ヨーロッパ社会の姿がスポーツに投影されている様子が窺える。

表4. 主なキーワード

キーワード	total
地域	21
サッカー	6
スポーツクラブ	5
ジェンダー	5
若者	4
国際イベント	4
スポーツ施設	3
コミュニティ	3
オリンピック	3
移民	3
EU	3

一方, 北米スポーツ社会学会を賑わせる「ドラッグ」, 「暴力」といったキーワードが比較的少ないことが印象的である。

さらに, 研究目的を大きく「地域政策」「社会問題」「地域スポーツ」「メディアスポーツ」「健康・青少年」「トップレベルスポーツ」の6つのカテゴリーに分類し, 開催国のドイツ, ヨーロッパのいわゆる東側諸国 (ロシア, チェコ, ポーランド, ハンガリー, ルーマニア), そして, ドイツと東側諸国を除いたヨーロッパ全体の地域ごとで比較した (表5)。ドイツとヨーロッパ全体では, 大会のテーマに即した地域スポーツを研究目的とした発表が最も多かったのに対し, 東側諸国の発表では9.1%にとどまった。その一方で, ドイツ以外では社会問題を扱った発表がヨーロッパで21.7%, 東側諸国では36.4%にのぼっている。イギリスやオランダでの移民スポーツや民族に関する問題が取り上げられ, そしてイタリア・プロサッカーにおいては過熱化しているフーリガンが

表5. 研究目的と地域別動向

n=138	ドイツ	ヨーロッパ (ドイツ, 東側諸国を除く)	東側諸国
地域政策	18.8%	19.3%	18.2%
社会問題	6.3%	21.7%	36.4%
地域スポーツ	31.3%	22.9%	9.1%
メディアスポーツ	25.0%	3.6%	4.5%
健康・青少年	12.5%	15.7%	22.7%
トップレベルスポーツ	6.3%	16.9%	9.1%

研究の対象とされることが多いためと思われる。
さらに東側諸国においては、暴動・ドーピングなどの問題が取り上げられていた。すなわち、それぞれの社会情勢によってスポーツが影響を受けており、それが研究動向に反映された結果と考えられよう。

おわりに

いくつもの国が国境を接するヨーロッパにおいて、ポーダレスな現代社会が抱える問題は多様化している。その様子がヨーロッパ・スポーツ社会学会の研究発表に見事に反映されており、そのことを直接感じ取ることができた。また、日本のスポーツ環境を海外の学会において発信することで、国際的なネットワークの構築に寄与していると考ええる。今後も継続して参加し、本学における教育・研究活動にフィードバックしていきたい。

最後に、本学会大会への参加、発表にご理解とご支援を頂いたことに、感謝の意を表したい。